

日本人のグローバル・コンピテンス 3C 要素育成へ向けた課題 —六ヶ国大学間連携プロジェクトにおける 批判的思考力、創造力と協働作業力—

鈴木 千鶴子¹ 石田 憲一² 吉原 将太²

^{1,2}長崎純心大学人文学部 〒852-8558 長崎県長崎市三ツ山町 235

E-mail: ¹suzuki.junshin@gmail.com, ²{ishida, shota}@n-junshin.ac.jp

あらまし 本稿は、グローバル化した社会で、日本語母語話者が英語を使って、世界の他の言語を母語とする人々とコミュニケーション実践した際に、どのような状況が展開され、その結果どのような能力(=コンピテンス)が必要とされるのか、を具体的に観察し、客観的・科学的な調査研究により明らかにする目的で実施してきた、世界六ヶ国の大学生参加によるオンラインプロジェクト実践における過去3年間の日本人参加大学生の活動実績に基づく一連の研究の総括的な報告である。特に「グローバル・コンピテンスの3C要素において、Critical Thinking(批判・論理・分析的思考力)が実のある Collaboration(協働作業力)を発揮させ、結果として Creativity(創造力)の発現へと繋がる。」との仮説を検証するために、2014年度のプロジェクトにおけるグループ・ディスカッションの活発化を観察軸に、それに係わる日本人学生のクリティカル・シンキング力(批判・論理・分析的思考力)の実態を探索した。結果、仮説に対して否定的要素は観察されず、具体的には次のことが示唆された:(1)異議に代表される批判・論理・分析的な発言が、最終的に全体の議論を活性化し、新たな解決を創造することに貢献しうる;ならびに(2)自己の発言の目的・機能を議論の文脈の中で明確に認識することが、そのような Critical Thinking 力の育成に重要である。

キーワード 大学間連携国際プロジェクト, コンピテンス・ベースの教育, グローバル・コンピテンス 3C 要素, クリティカル・シンキング力

Searching for Clues to Fostering 3C Components of Japanese Students' Global Competence

—Critical Thinking, Creativity and Collaboration—

Chizuko SUZUKI¹ Kenichi ISHIDA² and Shota YOSHIHARA²

^{1,2}Faculty of Humanities, Nagasaki Junshin Catholic University

235 Mitsuyama-machi, Nagasaki-shi, Nagasaki, 852-8558 Japan

E-mail: ¹suzuki.junshin@gmail.com, ²{ishida, shota}@n-junshin.ac.jp

Abstract This paper reports a conclusive result reached after three consecutive international project researches in which Japanese students participated working together with students from five other countries worldwide. The present study particularly focuses on verifying a hypothesis that the critical thinking may trigger the collaborative competence and lead to evoking the creative competence, among the three major global competences. The authors analyzed and classified all the messages uttered/posted by Japanese students in both the most active and successful group and the inactive and unsuccessful group(s) from the viewpoint of the purpose/function of the message in each discourse. This study, consequently did not show any negative result for the hypothesis and suggested that (1) offering an opposing opinion based on the critical thinking competence may contribute to activating discussion to create a new idea, and 2) the ability to clarify the purpose or function of his/her own message will take an important role to foster the critical thinking competence.

Keywords world-wide inter-university joint project, competency based education, 3C components of global competence,

鈴木 千鶴子, 石田 憲一, 吉原 将太, "日本人のグローバル・コンピテンス 3C 要素育成へ向けた課題: 六ヶ国大学間連携プロジェクトにおける批判的思考力、創造力と協働作業力," 言語学習と教育言語学 2016 年度版, pp. 25-36,

日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編, 早稲田大学情報教育研究所発行, 2017 年 3 月 31 日.

Copyright © 2016-2017 by Chizuko Suzuki, Kenichi Ishida and Shota Yoshihara. All Rights Reserved.

1. はじめに

1.1. 背景

英語教育に代表される外国語教育の目的を、言語の持つ普遍性への意識を高めることによりグローバル化への対応力を育成する、とする論も再興している^[1]。しかしながら現状では、実生活におけるグローバル化の進行に追いつくために、英語コミュニケーション力を高める、とする考え方が文部科学省をはじめとする共通認識であると捉えられよう^[2]。では、英語コミュニケーション力とは、聴く・話す・読む・書く、の四技能を伸ばすだけで達成されうるものなのか、との疑問が生じる。この問いに答えるためには、実際にグローバル化した社会で、日本語母語話者が外国語なり英語を使って、世界の他の言語を母語とする人たちとコミュニケーション実践した際に、どのような状況が展開され、その結果どのような能力(=コンピテンス)が必要とされるのか、を具体的に観察し、客観的・科学的な調査研究により明らかにする必要がある。

本研究者は、相互依存を高めるグローバル化社会で求められる能力として、英語コミュニケーション力を包括し、且つ最終的な目標達成の手段としての“国際協働作業力(International Collaborative Competence)”の重要性に着目し、日本人大学生を世界六ヶ国の大学間で共同実施する IPC (International Project Competence) 育成のための国際プロジェクトに参加させ、学生のグローバルな状況下での協働作業能力: Collaboration, の実態と発達過程について調査してきた^[3]。その結果、日本人はプロジェクト遂行において世界の参加学生との Collaboration には前向きで積極的であることが確認される一方で、参加学生らの個々の価値観に基づく意見の違いについて明確化し、違いを乗り越える共通見出しを見出し、新たな共通価値を創造するためにリーダーシップを発揮する場面は、ドイツなどの他の参加国の学生と比較して多くないことが示唆された。殊に、比較的活発な議論が交わされ、より生産的な結論が導き出されたグループ内での日本人学生の協働的言動・貢献は、客観的根拠に基づき、論理的言説により、率直に反論するクリティカル・シンキング力(批判的ないしは論理・分析的思考力)によって発揮されたことが、観察された^[4]。

1.2. 本研究の目的

以上二ヶ年度にわたる、日本人大学生のインターネット上での世界六ヶ国の大学参加による国際プロジェクトにおける「国際協働作業力」に関する研究から、仮説「グローバル・コンピテンスの3C要素において、

Critical Thinking (批判・論理・分析的思考力) が実のある Collaboration (協働作業力) を発揮させ、結果として Creativity (創造力) の発現へと繋がる。」をテーマに、2014 年度のプロジェクト実践を通して観察し、検証への出発点とする。

1.3. グローバル・コンピテンスとは

コンピテンス・ベースの学力観と授業観は、早くはフィンランドにおける教育に認められ^[5]、最近では日本においても導入の提唱^[6]および具体的な実践方法も示される^[7]に至っている。

とりわけグローバル・コンピテンスについて、進行するグローバル社会への対応能力の必要性の認識から、国内外の教育界に限らず経済発展を意識した政界からも注目されるに至っている^[8]。その内容について種々の議論が散見されるが、ここでは、NEA (National Education Association=全米教育協会) の概念と定義によるものとする^[9]。つまり、本研究の発端となった国際協働作業力: Collaboration を Communication 力とともに一大要素とし、他の二つの要素: Critical Thinking (批判・論理・分析的思考力) と Creativity (創造力) を合わせ、3つのCを頭文字とする要素より成るとする。

1.4. 本年度プロジェクトの概要

本研究が対象とする世界六ヶ国の大学生が参加する国際プロジェクトの概略^[10]は、以下のとおりである。インターネットを介し専用の SNS (Social Networking Service) 上で、参加学生と教員が国籍混成グループに分かれ、共通言語の英語で、教育に関する共通テーマ「子どもたちの学びについての感じ方考え方を知る」に関するトピックについて、12週から15週の間、次のステップを遂行する: 1) テーマの背景と先行研究の学習; 2) 研究方法の検討・決定; 3) 各国各地での調査の実施; 4) 調査結果のグループ内報告発表; 5) 他の参加国の結果を自国の結果と比較しグループ全体の結果をまとめ、他のグループを含めた各国内の参加者全員によるオフライン発表会で、その結果を報告。2014年度のプロジェクトの実施状況は、以下の通りであった。

(1) 参加者

・6ヶ国6大学: ブルガリア (ソフィア大学), ドイツ (アイヒシュテット・カトリック大学), 日本 (長崎純心大学), スペイン (グラナダ大学連盟イマキュラダ校), ポーランド (アダム・ミツキェヴィチ大学), 米国 (カルフォルニア州立大学フラトン校)

- ・学生 120 名・教員 16 名 合計 136 名
- ・日本：学生（2 年生～4 年生：最多 2 年生）17 名，英語力平均概算 CASEC550 点≒TOEIC465 点；教員 3 名
- (2) 期間：後期（10 月～1 月）約 4 ヶ月間
- (3) テーマ
2010 年度以来の共通テーマ“Children’s Perspectives on Learning”（学びについての子どもの感じ方考え方を知る）
- (4) トピック：Homework（宿題）について
- (5) グループ：10 グループ。

1.5. 前年度プロジェクトにおける日本人参加学生のグローバル・コンピテンス—Collaboration 力を焦点に一

先行する 2013 年度のプロジェクトの実績に基づく知見については、『日本英語教育学会第 44 回年次研究会論文集』で、主に英語コミュニケーション力の伸長を軸として、その伸長と、IT 利用経験や性格特性、グループ構成など他の外的（関連）要因との相関関係に焦点を当てて検討・評価し、結果を報告^[4]した。そ

の稿の考察の最後および今後の課題の中で、国際協働作業力（Collaboration）をはじめとするグローバル・コンピテンス育成の必要性について言及した。その根拠となったディスカッション・フォーラムでの参加学生たちの発言をデータとする分析・考察結果^[11]について、その要点を、以下に翻訳・再掲し、本稿の前提・序論とする。

1.5.1. 日本人学生の発言量について

プロジェクトを滞りなく進行できた 8 グループのディスカッション・フォーラムにおける発言データを収集し、参加学生の出身国別に 6 つのサブ・コーパスに分割した。それぞれの発言活動のプロフィールを見るために、それらのコーパスを WordSmith5.0^[12]を用いて分析し、表 1 の結果を得た。

これにより、ドイツの学生たちが最も活発に発言したことが明らかになるとともに、途中参加であったため結果が残せなかったポーランドを除き、日本の学生の発言が全体的にも一人当たり平均でも極めて少ないことが示された。

表 1 ディスカッション・フォーラムでの国別発言コーパス：プロフィール比較

Text file	Overall	Bulgaria	Germany	Japan	Poland	Spain	USA
file size	274,463	38,018	107,515	23,786	1,478	35,697	67,969
tokens (running words) in text	48,990	6,915	19,345	4,128	248	6,547	11,807
tokens used for word list	47,896	6,763	18,981	4,011	240	6,421	11,480
sum of entries	0	0	0	0	0	0	0
types (distinct words)	3,304	1,006	1,753	625	84	1,023	1,665
type/token ratio (TTR)	6.9	14.88	9.24	20.57	35	15.93	14.5
standardised TTR	33.07	31.68	32.21	34.5		33.63	34.47
standardised TTR std.dev.	65.05	57.8	62.69	51.45		55.14	58.57
standardised TTR basis	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
mean word length (in characters)	4.31	4.26	4.3	4.4	4.63	4.2	4.37
word length std.dev.	2.42	2.38	2.37	2.44	2.86	2.32	2.54
sentences	51,478	486	1,258	372	24	463	1,003
mean (in words)	13.97	13.92	15.09	10.78	10	13.87	11.45
std.dev.	3.18	11.81	13.24	9.7	5.36	13.24	10.09
no. of students	66	8	13	11	5	14	15
token/student ratio	272.27	864.38	1488.08	375.27	49.6	467.64	787.13

1.5.2. 日本人学生の発言内容の特徴について

上記ように日本人学生の発言は量的に比べた場合、圧倒的に少ないことが確認されたが、質的にどのような内容の言葉を発信しているのかについて、同上のサ

ブ・コーパスを基に、各国のターゲット・コーパスに対してその他 5 ヶ国のサブ・コーパスをレファレンス・コーパスとして、AntConc 3.4.2w^[13]を用いて特徴語を抽出することにより、探った。表 2 にその結果を、単

語の 7 つの機能別分類：挨拶語；包括語 we など；認識様態語；IPC に固有の用語；プロジェクトに固有の語；方法に固有の語；トピックに関わる語，について
の色分け表示を加えて，掲載する．

表 2 国別発言コーパス：特徴語比較

Rank	Bulgaria	Germany	Japan	Poland	Spain	USA
1	from	anna	teaching	questionnaire	spain	rules
2	presentation	greetings	japanese	audience	granada	class
3	ve	we	thank	century	lve	classroom
4	denica	sophia	kaori	embrace	greeting	everyone
5	research	maybe	hi	extracurricular	pass	grade
6	results	ipc	draft	gathered	draws	student
7	bulgaria	everybody	q	relate	think	does
8	dear	lt	however	target	yolanda	follow
9	bulgarian	our	japan	childhood	is	happens
10	make	story	group	documents	gymkhana	your
11	opinion	gdo	m	holiday	ls	these
12	questionnaire	german	sorry	hi	first	savannah
13	katrin	com	questionsin	appear	rules	states
14	put	networks	contents	attached	in	assignments
15	educational	researches	elementary	available	gadgets	united
16	one	mixxt	yuki	recess	spend	dr
17	publish	it	ask	compare	convivence	internet
18	summarize	folder	questionnaire	download	eassier	how
19	m	drawing	chika	times	image	following
20	luck	http	margarethe	favorite	imageshack	powerpoint

Category Legend

	Addressing/greeting words		IPC-specific terms
	Inclusive 'we'		Project-specific words
	Epistemic expressions		Method-specific words
			Topic-related words

この結果から，ドイツの学生たちは 7 つの機能の内，IPC に特化した用語を含め，その他の種類についても比較的満遍なく使用する傾向が示されるとともに，例えばブルガリアはプロジェクトに固有の単語，スペインは調査の方法に関わる単語を相対的に多く使用するなど，各国それぞれの関心事・焦点が異なることが表出された．殊に，日本の学生については，挨拶語や認識様態を表す語（例：however）などの使用が特徴的であることが明らかとなった．以上のことより，日本人学生は，他の国の参加学生たちと挨拶を欠かさず（例：Hi!），謝ったり（例：Sorry），盛んにお礼を述べ（例：thanks）て，プロジェクトならびに参加相手に対して好意的・協調的であった，と推論することが出来た．従って，国際協働作業において，日本人学生はそれなりの立場を認識し，それなりの役割を果たしている，少なくとも果たそうとしている，ことが窺えた．

1.5.1. 日本人学生の協調的発言語 agree の使用割合

以上の結果から観察された，日本人学生の国際協働

作業における協調的側面は，プロジェクト遂行の過程で具体的に用いられる賛同を意味する動詞 agree が，特徴語ランキングにおいて上位であったことから支持された．

さらに，この agree の使用割合を，各グループ内での国別の全メッセージ数の割合との対比で見ると，表 3 の結果が得られた．

表 3 各グループ内における国別全メッセージに対する agree の使用割合の比較

	Bulgaria		Germany		Japan		Poland		Spain		USA	
	agree(%)	msge(%)	agree(%)	msge(%)	agree(%)	msge(%)	agree(%)	msge(%)	agree(%)	msge(%)	agree(%)	msge(%)
Group 1			75.0	63.0	12.5	6.3	12.5	11.3				
Group 3	11.1	24.4	61.1	54.9	11.1	2.4			16.7	18.3		
Group 4	27.3	30.1	27.3	54.8	9.1	2.7					36.4	12.3
Group 5					11.1	17.4			44.4	10.1	44.4	72.5
Group 6	33.3	20.0			33.3	8.0					33.3	56.0
Group 7	50.0	5.6			25.0	13.9			25.0	47.2		
Group 8			33.3	88.2	66.6	11.8						
Group 9	37.5	27.8	37.5	27.8	12.5	2.8			12.5	41.7		

上記の表により，日本人学生は全てのグループで agree が出現していること，且つその割合は，グループ

内での日本人学生による全メッセージ数との対比で、Group 5を除き、より多いことが、確認された。このような現象は、他の5ヶ国については見られなかった。もっとも、日本人学生のagreeの過剰使用については、本ディスカッション・フォーラムにおける双方向コミュニケーションに限らず、課題英作文のアジア10ヶ国の大学生の学習者コーパス ICNALE^[14]においても、示されている。

これらの結果から、日本人学生は、一般的な傾向として同調的である可能性も含め、少なくとも本国際プロジェクト活動において、リーダーシップを発揮する他国の学生の意見・提案に賛意を表明し、プロジェクトの進行に寄与しようとした点で、協働的な面はあると判断された。

しかしながら、動詞 agree を使用した文:sentence 内における共起語、およびその文の前後の文脈について少し詳細に分析してみると、提案者の意見内容を十分に審理した上で明確な理由を伴って賛同した形跡は乏しく、追従傾向が強く創造的な発想の発言とは言えないことが推察された^[15]。併せて、本研究者らの参加学生たちとのプロジェクト活動での関わりの中から、以下の点がプロジェクト活動を通して経験的に問題視されていた。“学生たちは、教師側が指示をすると、それに対しては素直に受けて活動する。しかしながら、物事の全体を見通して、グループのメンバーの言っていることの筋道を考えて、批判的・論理的に検討するところまではいかず、言われたことを鵜呑みにしてしまう傾向がある。”つまり、「自分ならどうするか」「代替案は何が適切か」「今、最も大切なことはなにか」という視点が、ネット上での英語での討論や、協働で欠けているのではないかと、ということ疑問・課題として取り上げる必要がある。

そこで、本研究において、2014年度のIPC実践に基づき、この課題に取り組むために、以下の方法により、日本人学生のクリティカル・シンキング力（批判・論理・分析的思考力）の実態を探索することとした。

1.6. 方法

2014年度のプロジェクトでのトピックは、10のグループ間で「宿題:Homework」に統一したことから、グループディスカッション・フォーラムで、(1)投稿:Postings数の量、ならびに(2)メンバー一人当たりのPostings数の割合、によりそれぞれ最も活発であったグループと最も不活発であったグループを抽出し、それぞれのグループにおける日本人の全ての発言を、前後の談話のコンテキストの中で内容的・質的に検討した。

上記の方法(1)のPostings数により、最も活発であったグループはGroup 9、最も不活発であったグル

ープはGroup 8、方法(2)のメンバー一人当たりのPostings数の割合で最も活発であったグループは同じくGroup 9、最も不活発であったグループはGroup 6であった。(表4参照)

表4 Postings数とメンバー数およびメンバー一人当たりPostings割合のグループ間比較

	Postings	Members	Postings/ message
Group 1	173	20	8.65
Group 2	188	20	9.4
Group 3	223	23	9.7
Group 4	152	21	7.24
Group 5	166	19	8.74
Group 6	143	20	7.15
Group 7	143	18	7.94
Group 8	123	15	8.2
Group 9	359	20	17.95
Group 10	220	20	11

この方法により、最も活発であったグループをGroup 9、不活発であったグループをGroup 6とGroup 8として、それぞれのグループにおける日本人学生の発言内容を質的に検討し、それぞれの発言の機能の観点から分類した結果、以下の結果を得た。

2. 結果

活発なグループ内でのディスカッション・フォーラムは2つのトピック：“How children experience homework”と、“Qualitative research and methods with children”より成り、それぞれ64 postings; 357 visitsと、295 postings; 1140 visits, 合計: 359 postings; 1497 visitsであった。

対して不活発なグループは、どちらのグループも1つのトピックで、そのトピックについてのpostingsとvisits数は、それぞれ以下の通りであった。“The search for a topic”: 123 postings; 657 visits, と“Hello”: 143 postings; 610 visits.

以上の結果から、活発と不活発なグループの間では、発言数だけでなく閲覧:visits数においても、量的に倍以上の違いが認められた。

2.1. 活発なグループの日本人学生の発言

Group 9における日本人学生AならびにBの発言を時系列に取り出し、それぞれの発言についてAlex Fisher^[16]を参考に、機能分類を行った結果は以下の通りであった。

発言者	機能	日付
1. A:	excuse	11/1
2. A:	inform/report	11/3

3. B: inform/report	11/3
4. A: explanation	11/19
5. A: procedural explanation	11/20
6. A: question on procedure	11/21
7. A: question on contents re: racial discrimination	11/21
8. A: question on procedure	11/21
9. A: alternate proposal	11/22
10. A: create an alternate story	11/22
11. A: compromise with others	11/23
12. A: reasoning	11/23
13. A: information	11/23
14. A: insisting on necessity of consideration	11/24
15. A: summary of her opinion	11/24
16. B: excuse & report	11/24
17. A: reaching an agreement	11/26
18. A: explanation & questions	11/26
19. A: inform/report	11/26
20. A: request with reasoning	11/26
21. A: proposals with explanation & questions on procedure	11/27
22. A: information & a proposal	11/28
23. A: proposal & questions	11/29
24. A: information & question	11/30
25. A: information & question	12/4
26. A: information, question, & request	12/4
27. A: information/report	12/11
28. A: explanation & report of results	12/14
29. A: explanation & invitation of question	12/15
30. A: agreement with procedure	12/16
31. B: excuse & appreciation & agreement	12/17
32. A: excuse & inform/report	12/21
33. A: appreciation	12/21

この一連のディスカッションの中で注目すべきは、日本人学生 A が 7 番目の発言で初めて、手続き的なことではなく、内容に関してドイツ人学生から出された提案に異議・疑問を発したことである。特に先導話として小学生に提示する予定の話の中で例として出されるインドの子どもについて、差別的な意味を日本人の子どもたちに押し付けてしまわないか、との問いかけを行った。その発言をきっかけに、さらに手続き的なことについても疑問を発し、かつ代案を積極的に提案する発言と続き、それを受けてドイツの学生たちもより詳細に調査確認する必要があることを認めるに至った。結果的には、様々な意見の交換を経て、インドにおける一部の状況として 5, 6 年生に事実を伝えることは問題ないのではないかととの合意に達し、多少の内

容の変更を経て、提示する先導話の完成をみた。

なお、日本人学生 A と日本人学生 B の英語力は TOEIC において、それぞれと 510 点と 485 点で、大きな差はなかった。

その日本人学生の実際の発言と、それに対するドイツ人学生の応答による議論の発展の状況を、巻末に資料 1 として引用掲載する。

2.2. 不活発なグループの日本人学生の発言

Group 6 における日本人学生 J の発言を時系列に取り出し、2.1. と同様に、それぞれ発言について機能分類を行った結果は以下の通りであった。

発言者	機能	日付
1. J:	excuse, self-introduction & inform/report	11/4
2. J:	repeat of the above 1 & request	11/4
3. J:	appreciation & inform/report	11/26
4. J:	inform/report	1/6

Group 8 における日本人 P の発言を同様に分類した結果は以下の通りであった。

発言者	機能	日付
1. P:	self-introduction & inform her plan	11/4
2. P:	repeat of the above 1 & inform/report	11/4
3. P:	excuse, proposal & inform/report	11/23
4. P:	question & inform her plan	12/2
5. P:	report, request, agreement & opinion	12/9
6. P:	confirmation, request, question & inform	12/16
7. P:	report, appreciation & inform her plan	1/12
8. P:	report & request	1/13
9. P:	report & request	1/13
10. P:	final report	1/13

Group 6 においては、日本人学生の発言は極めて少なく、かつ挨拶の機能に偏しており、繰り返しを含め新規の情報は非常に限定的である。なお、当該の日本人学生 J の英語力は、TOEIC 受験経験がなかったため、数値で示すことはできない。

同じく不活発であった Group 8 における日本人学生の発言については、次の 3 つの特徴が見られた。①一回の発言に複数の機能のメッセージが含まれることが多い。ないしは、改行またはパラグラフを区別すること無しに、異なる機能のメッセージ文を連続して述べる。②一方で、複数回の（連続してはいるが）発言で、同様のメッセージを繰り返す傾向がある。③これから取る行動について漠然とした予定を予告するメッセージが多い。

当該の日本人学生 P の英語力は、プロジェクト参加

の2年前に受験した TOEIC で 455 点であったが、1 年前に半年間の留学経験があり、プロジェクト参加時の英語の実力は 100 点程度高いと考えられる。

この不活発だった2つのグループの実際の議論の状況を、それぞれの日本人学生の特徴を例示している部分を抜粋し、同じく巻末に資料2として掲載する。

2.3. 英語力と論理的発言の関係

以上の結果から、クリティカル・シンキング力に基づくと考えられる question や reasoning, opinion, proposal のような機能を持つ発言ができること、つまり論理的発言能力は、英語力の高さにどの程度依存するものなのか、言い換えれば、英語力が低いために論理的発言ができないのか否か、を検討すると次の結果が得られた。(1) 同一グループ内で論理的発言をした A としなかった B との間には、TOEIC において大きな差はなかった。(25 点差) (2) 論理的発言を明確に行えなかった P の英語力も、A と大差なく、実際には上回っていると状況的に判断された。

3. まとめと考察

以上の結果を総合的にみると、国際協働作業のディスカッションが活発化するか否かに関わる条件下において、日本人大学生の発言姿勢と能力に関して、次のことが指摘されよう。

- (1) 異議に始まる積極的な発言が、最終的に全体の議論を活性化し、誰もが納得する見解を作り出すことに貢献しうる。(2.1. 参照)
- (2) 対して、挨拶や言い訳に終始したり、他国のメンバーによる提案に賛同したりするばかりでは、グループ全体の議論の活発化を生み出す可能性は低くなる。(2.2. 参照)
- (3) 自分が発するメッセージを相手の発言に対してどのような機能となるかを認識し、その機能・目的に合わせた内容にしばり、発言することで、議論がかみ合い発展し、内容的に意義ある成果を得ることを体験できる可能性が高まる。(2.2. の①と②参照)
- (4) (3)と同様に、自分のメッセージの機能として、自分の行動の予告や宣言を目的とする発言は、モノローグ的な効果しか得られず、コミュニケーションをつなぐ役割以上の力は発揮できない。(2.2. の③参照)
- (5) 英語で批判・論理・分析的発言をするためには、ある程度 (TOEIC500 点) の英語力が必要であるが、英語力は十分条件ではなく、加えて (3) (4) で得られた知見に基づく指導と学習が必要である。(2.3 参照)

これらのことから、本研究の最初に掲げた仮説「批判・論理・分析的思考力に基づく発言が、その先の真の協働に寄与し、そこから新たな問題解決や創造が生まれる」は、データの的に少ないながら談話の質的分析により、否定されることはなく、更なる継続的調査により検証を高めていくべきことが確認された。

4. 今後の課題

今後は、出発点となる批判・論理・分析的思考力をどのように育成すべきか、が具体的な課題となろう。そこで、ヒントとなるのが考察の(3)で指摘されたように、先ず自分の発言に対して、その機能・目的を意識できるようにするべきと考える。それには、発言の機能・目的の種類を知ること、それぞれの機能の適切な使用環境を理解することが必要である。併せて、本プロジェクトで利用しているインターネット上のプラットフォームでは、一回の発言で単一の機能に焦点を当てた発信をする指導が、明示的に可能で効果が期待できることから、実践し検証する必要がある。

教育実践においては、大学教育におけるカリキュラムの全教科、特にゼミを中心に、普段の授業の中で、訓練の要素も含め、批判・論理・分析的思考力の育成に注視し、コンピテンス・ベースの教育を遂行することも必須であろう。

なお、本報告は科研費助成研究「国際協働作業力に係わる大学生の英語力の内外要因とその発達過程に関する実証的研究」(基盤C)(2012~2014年度)の一部として、主に第三年度に実施した研究および三年間の研究の総合考察に基づくものである。

謝辞

本研究はJSPS 科研費基盤(C)の助成を受けたものです(平成24年度~26年度)。本プロジェクトの主導者Dr. Klaudia Schultheis (Catholic University of Eichstaett-Ingolstadt), ならびにプロジェクト参加大学の全ての教員と学生の皆さんに、併せて感謝申し上げます。

註) ドイツの The mixxt GmbH より開発・運営される Web 2.0 を用いたプラットフォームで、本 IPC プロジェクトのドイツのスタッフメンバーであった Michael Kracky が 2009 年に協働作業を効率よく実現できるようカスタマイズ設計し、Wiki や Forums, Group Sites, File Box などの機能を備える。 <http://ipc.mixxt.com/>

文 献

- [1] 江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄, 『学校英語教育は何のため?』 ひつじ書房, 2014.
- [2] 文部科学省, “グローバル化に対応した英語教育改革実施計画”
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/
 (2013 年 12 月)
- [3] 鈴木千鶴子, 石田憲一, 吉原将太, “六ヶ国八大学間連携による mixxt を利用した国際プロジェクトの成果について—日本人大学生の英語力の伸長と参加度・性格・IT 利用経験との関係から—,” 日本英語教育学会第 43 回年次研究集会論文集, pp. 41-47, 2014.
- [4] 鈴木千鶴子, 石田憲一, 吉原将太, “大学生のグローバル共通知識構築へ向けた コミュニケーション能力と関連要因の一考察 —六ヶ国八大学間連携による SNS 利用の国際プロジェクトでの展開—,” 日本英語教育学会第 44 回年次研究集会論文集, pp. 35-42, 2015.
- [5] 福田誠治, 『フィンランドはもう「学力」の先を行っている—人生につながるコンピテンス・ベースの教育』 亜紀書房, 2012.
- [6] 奈須正裕 (編), 『シリーズ 新しい学びの潮流』 ぎょうせい, 2014.
- [7] 奈須正裕・江間史明 (編著), 『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』 図書文化, 2015.
- [8] United States Department of Education, ed. Our Future, Our Teachers: The Obama Administration's Plan for Teacher Education Reform and Improvement. 2011. Retrieved at <https://www.ed.gov/sites/default/files/our-future-our-teachers.pdf> On Dec. 2014.
- [9] NEA (National Education Association), “Preparing 21st century students for a global society. An educator's guide to the ‘Four Cs’.” Retrieved at <http://www.nea.org/assets/docs/A-Guide-to-Four-Cs.pdf> Oct. 2014.
- [10] Schultheis, K. (2016). International Project (IPC): An Innovative Online Teaching Project fostering the Internationalization of Teacher Training. <http://www.internationalproject-ipc.com/en/>
- [11] Suzuki, C., K. Ishida, S. Yoshihara, K. Schultheis, & B. Riedhammer. A Quantitative and Qualitative Evaluation of Student Participants' Contribution to Carrying out an Online International Collaborative Project on Education. CALL Design: Principles and Practice-Proceedings of the 2014 EUROCALL Conference, Groningen, The Netherlands, Edited by Sake Jager, Linda Bradley, Estelle J. Meima, Sylvie Thouësny. 345-351, 2014.
- [12] Scott, M. WordSmith tools version 6. Liverpool: Lexical Analysis Software, 2012.
- [13] Anthony, L. (n.d.). AntConc. 3.2.4w. Laurence Anthony's website. Retrieved from <http://www.laurenceanthony.net/software.html>
- [14] Ishikawa, S. ICNALE: The International Corpus Network of Asian Learners of English. available at <http://language.sakura.ne.jp/icnale/>.
- [15] 鈴木千鶴子, 石田憲一, 吉原将太, “六ヶ国連携国際プロジェクトへの学生参加によるグローバル・コンピテンス育成—五ヶ年間の活動を通じた進展—” 大学英語教育学会 第 54 回 (2015 年度)
- 国際大会「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み『第 3 弾』テーマ：グローバル人材育成に向けた大学の連携事業」ポスター発表、2015.
- [16] Fisher, A. Critical Thinking: An Introduction. 2nd ed., Cambridge International Examinations, 2011.

資料 1 : 活発だったグループの議論過程例抜粋
(スペルミスのみ本稿筆者が訂正)

Group 9
<21/11/2014>

Japanese A: Hello, I read the text about an Indian boy. Thank you for writing to Kim. The story is good but I think Bharat should not be an Indian boy. Although India is a developing country all right, it may be prejudice. Especially, school children in Nagasaki where is my hometown learn about peace, prejudice, discrimination and bullying. Moreover, there are many foreigners and half Japanese and half other foreigners in Nagasaki. Therefore, I think Bharat should be a child in an imaginary country even only country name. For example, I think the name is Asante. That's mean "thank you" in Swahili. Maybe, the members of group9 don't speak in Swahili. What do you think? The name is everything OK if it is faceless country. That's all my opinion about an Indian boy. I'll translate to Japanese later. Where will I write it, this forum or wiki? Thank you for reading. Best wishes, Student A.

German student A: @ A: It would be great if you can find about 20 students like in one class. In Germany there are about 20 students in one class. How many students do you usually have in one class in Japan? So i think it's fine if you can find as much students as you regularly have in one class!

@ Adrianna: Maybe you can download a PDF Converter from the Internet. It's normally for free. Then you should be able to open the documents 😊

Japanese A: @Maria: Thank you for teaching we need the number of the children for search.

I searched the number of elementary school students in Japan. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology said that the maximum is normally 40 students in 1 class but until 2nd grade of primary school's maximum is 35 students.

source:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/029/shiryo/05061001/sankou002.pdf%E6%97%A5%E6%9C%AC+%E5%AD%A6%E7%B4%9A%E4%BA%BA%E6%95%B0

Japan grows declining number of children and there are around 20 students in 1 class in my hometown.

However, past Japanese IPC members searched primary school that is too small near my university.

For example, there are only 8 students in 6th grade of primary school.

Moreover, I have a question. Will you ask for public school students or private school students?

A

Polish student: @All Well, I don't know how it is in Japan but an Indian boy named Bharat will work in Poland - Polish kids do not have a lot of knowledge about the Indian educational system so it won't be hard for them to believe that a child may have problems with getting into a school there because of financial reasons. We are not discriminating them, we're just trying to find a country that is far away so the interviewed children don't know it well. The nationality is not the point of the research (well, it is, but not in that sense).

I guess that it wouldn't be a problem to change the nationality and the name for the Japanese version. Or would it? Because I'm not sure it is necessary in all the languages we have here...

My other question is about the number of children in class - I have one class consisting of 8 people so am I supposed to look for another one?

@Maria, you said that in Germany you're going to interview 20 kids. I guess that 8 children isn't enough, right?

German tutor: (中略) In general I am very impressed of the information A has offered. 40 or 35 children in one class that's a lot! I admire the Japanese teachers J I think all these facts are very helpful for our research. J I also like your question if we will work in public schools or private schools. This is a point we haven't discussed before (In general thank you A, you work very busy right now on the project). **In our German team we'll work in a public school. What about you Amanda, Dominika and Ada?**

I've added the sort of school (private or public) to the text in our wiki and to the table in our document in the file section (called FINAL3 Group 9). So please fill in if you are working in a public or a private school during the research 😊

I think if the German and the Polish team and Amanda will do the research in a public school it would be helpful if Student A would work in a public school as well. **What do you think?** The equalier our frame conditions are the best we could find out more about international differences. So: Student A, just wait until we got all these information and have discussed them.

By the way, I think you have mentioned an important fact. I like the idea that children should learn about peace etc. in school. I think if Bharat would be a boy who lives in India it could motivates the children more because they know that India really exists. When they write their letter they think they write it to a real Indian boy. If we create a

'fantasy- country' the children might know that their letters will never been sent to the boy, but I'll keep your thoughts in mind. Maybe we could find a solution together where we can include your idea and the idea of talking about a real country. Maybe the children don't know that there isn't a nation called for example Asante and they think it's real to? **What do you think?** Ada has already posted her opinion and I am curious about your views.

I've uploaded the document which Kim has uploaded as a word- document and added some information. Please have a look if you can add some information 😊

German tutor: Hey, sorry it's me again. I just wanted to mention that our File section is really messy!! I've just kicked (accidentally) our first assignment out, but reloaded it again so don't worry! But please everybody have a look what we could take out 😊

@Student A: I've added your information about the Japanese school section to our document in the file section 😊 So you don't have to add it yourself.
<22/11/2014>

Japanese A: Hello, If it's possible, I search 6th grades of 8 students in elementary school.

However, I have a problem that is there are **only 8 girls**. So, if you want boys' students data, I need to look for other school or change other grade in same elementary school.

Moreover, at the present time, I'll search for 6th grade of students. If you'll search for the schoolchildren in the lower grade (1st grade or 2nd grade), I should be the same grade.

After that, I think we should change an Indian boy into other fantasy country. I have two reasons. First, many foreigners live in Nagasaki. When I go to a convenience store, the shop assistants are Chinese or Philippine probably. So, we have a chance that we see many foreigner. Children may misunderstand about many foreigner cannot study. Second, the reason is important. Last year, it happened the problem of bullying in elementary school in Nagasaki. The girl bullied had committed suicide in her house. Although the board of education didn't announced to her information, I heard from Prof.Suzuki that the girl was a half Japanese and a half Philippine.

Therefore, I think we should not be a real country carelessly. Student A

German student: Hey everyone, in my opinion we should also use a real nationality for the boy because I agree with Sarah. For example in our class (they are 9 years old) the children won't probably work seriously on that topic if they know that there letters will just be read by

their teachers. But I understand Student A's point and I would suggest that you change the nationality in your research. What do the other's think about it? I think this is better than creating a country that sounds real, like Asante, because I think the students will be more motivated and work more seriously on the task if they know the country.

I uploaded in the file section a first version of a worksheet where the students could write their letters on it. It's simple but I thought this might be good because then they aren't influenced by other things and maybe they write down their true emotions. I also added a German version of this worksheet. so please tell me what you think about it 😊

Maybe we can kick out older parts of summaries and just leave in the final versions?

Kind regards, Maria

資料 2 : 不活発だったグループの議論過程例抜粋
(スperlミスのみ本稿筆者が訂正)

Group 6

<25/11/2014>

German student A : Hello guys! Did you already start working with the children? We only have **3 1/2 weeks left** (Dec 21st)! That's part of the task:

"For the texts it would be good to have a class. For interviews 2 children in each of your countries will be sufficient."

So I think this week I will interview 2 children (4th graders) and I will ask a 3rd grade to write the text. What do you think? How shall we go on? Did you already do something? And if yes, how was your experience with the children / teachers? Have a nice week - and let's stay in touch 😊

German student B: Ah and here I've got the Initiative story in German. I've changed some things a little bit, because I will be working with smaller children (Primary school). 😊

Polish student A: Tomorrow I'm going to ask if I can conduct the research in the school where I'm having my teaching practice 😊 I hope I'll get the answer soon. I'll let you know how things are going.

Polish student A: What about Erasmus students? Do you know guys what do to? Because how can you anything with children being in a foreign country? ;O

<26/11/2014>

Japanese J: @Jasmin, thank you for files. I will send out children questionnaires.

Polish student B: Hi guys! When it comes to me, I have already talked to the headmaster of the school I'm having my teaching practice in. However, everything needs to be approved - the story, the questionnaires. What is more, I need the consent form from the students' parents - so I believe it will take some time. But I have got a question - if we need to interview two children from each country, does it mean that we can add the numbers up (e.g. me - one child and Karolina - another one)?

German student A: Yes, I think so, Mateusz! 😊 Two children for you two together.

Group 8

①一回の発言に多数の機能

<08/12/2014>

Polish student A: Hi everyone. I am so very sorry for my lack of contribution but the past few weeks were a real

mess 😊 I am a little bit confused, sorry for that, but is there any specific plan we agreed on? 😊

I see we have questions and a story (I like that).

I agree with Sandra that maybe we should interview 2-3 children so that it will be more thorough and simple to summarize.

There are only two weeks till the end of the project but I'll try to catch up!

<09/12/2014>

Polish student B: Guys, is the deadline for our presentation on 21 Dec? Or can we finish the presentation after Christmas?

And do you think we should only 2 kids from Poland, even though there are three of us in here?

Japanese student P: Hi everyone, I've just uploaded our story in Japanese on our group 8 Wiki. If you haven't done yet, don't forget that. 😊 I agree with Sandra and Natalia. I think we can explain well if we ask 2-3 children and that'll be good result. And I think asking 9 years old kids is fine just like Fatma did. What do you guys think? Student P.

<11/12/2014>

German teacher: You need to ask your teachers about the dates of your final presentations. Some might be available in Time Schedule already.

I am not sure about your time schedule for working with the children. It would be a big help for me if you post more details about what you are doing and planning in the forums. Not only to let me know but the other team members too. Thanks!

②同じメッセージを繰り返す (その一)

<02/11/2014>

Polish student B: Hey... So, should we upload what we have in our Wiki to the files area? Heike's file with all the academic references is, of course, great, but there is nothing about homeworks in different countries. What do you think guys? Is the deadline in 2 hours or in 26 hours 😊?

German student: Hey ho, I've uploaded an updated file with the wiki-stuff. Only thing missing would be a summary/ comparison between the countries. I think the findings are quite similar, what do you think? Please check and add a summary sentence. I have to go to bed now.

Best, HG

<04/11/2014>

Japanese student P: Hello. I'm Student P from Japan. I'll upload information about homework in my country soon.

Please check it out.

Student P.

Japanese student P: I uploaded about Japanese homework on our group 8 file so please check it!!

German teacher: Hi Student P, please add your results to the group file - the latest version is from Agata. Check the file and add your part. Maybe also add a sentence to the conclusion that Japan is included.

Thank you and please come back to me if you still have questions. I will be ok with the late finalization of the task.

②同じメッセージを繰り返す（その二）

<13/01/2015>

Japanese student P: I added my research to "IPC_final_presentation_v5.ppt". Please check it!!

Student P.

Polish student B: Guys, I've uploaded the 5th version which I've slightly corrected linguistically, mainly spelling mistakes and I changed the structure of the main question. I think it should be "what affects...?" not "what does affect...?".


Student P, when you add your findings, add your name on the first slide too, please.

Good luck with your presentations! 😊

Japanese student P: OK. I've just added my result to Agata's one. The newest presentation is "IPC_final_presentation_v6 corrected.ppt". Please have a look.

Student P.

Japanese student P: This is the link of the final presentation 😊

 IPC_final_presentation_v6 corrected.ppt

③行動の予告（その一）；①の例でもある

<11/12/2014>

German teacher: You need to ask your teachers about the dates of your final presentations. Some might be available in Time Schedule already.

I am not sure about your time schedule for working with the children. It would be a big help for me if you post more details about what you are doing and planning in the forums. Not only to let me know but the other team members too. Thanks!

<16/12/2016>

Japanese student P: Hello. Have you guys already done working with children?

If so, please let us know how was that and who did you ask especially their age and their number?

If we don't need to make up the number or age of them, I'm going to ask some children around 9-12 years old who I can contact.

We decided to search to let them write free texts and draw pictures and don't we need to ask any questions and their answers?

Student P.

German student: Hello again, tomorrow I'm going to collect some data in a school: 1st grade, age ~6 years, as much pupils I can get

I will follow the research manual in the wiki.

Goodbye, HG

③行動の予告（その二：漠然とした予定）

<11/01/2015>

Polish student B: Heiko, thank you so much indeed! The presentation is just great 😊!

We will write the Polish summary with Natalia and Sandra and publish it by Tuesday morning. Is that fine, or would you rather have it tomorrow guys?

German student: No Prob. Tuesday morning would be ok for me.

Japanese student P: Hello everyone. I uploaded my research "Japanese research", "Drawing 1 (Japan)", "Drawing 2 (Japan)". I'm so sorry for being late. Please have a look.

Heiko, thank you so much for the wonderful presentation. I'll add my research soon.

Student P.